

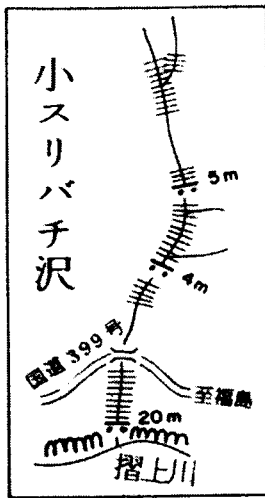
小スリバチ沢

文(身狭)

一九八三年六月四日

一六時一五分、下降開始。一〇分程下ると細い流れに突きあたり、更に五分程で本流(ブツシユにおおわれた細い流れでしかない)に出る。ここで、一応ブツシユから解放された。

この沢も水はチヨロチヨロと流れているだけである。しかし、この沢の水も完全に涸れてしまうことはな



さそうだ(サンシヨウウオがいる)。少し下ると五箇の滝に出る。右岸に足場が刻まれているので、楽に下る。この沢も伐採作業の時の通り道

赤津沢左俣

一九八三年六月四日

一五時三〇分、遊行開始。五箇滝は真中の水の流れていない所を直登し、五分で二俣まで行きつく。左俣に入るとすぐ五箇の滝が出てくる。直登する。その先にも滝が続く。そして一〇箇滝。これは左岸を

となっていたのであろう。

下降するにほど良い傾斜のナメが続いて順調な下りである。次の四箇滝も右岸に足場が刻まれていた。一六時四五分、国道三九九号に出て下降終了とする。

下降終了(一六:四五)

捲いて上に出る。ここまできたら水量は急減した。そしてその先の五箇滝の左岸を捲いて上に出た所で、水の流れは消えてしまった。その中を沢は細いトイ状となつてなおも続いている。

岩の上に葉を小さく巻いたような形のものが多数落ちていた。オトシブミだ。「落し文」に由来する優雅な名前をもつ小さな甲虫が、せつせと葉を巻いて、子供のためにエサと居室を準備したものである。人の目にふれないこんな山奥にも、子孫繁栄のための営みがひっそりと続けられている。

沢は所々ヤブがかかるようになっていた。もうおしまいである。一六時〇五分、沢から離れてやぶこぎに入る。一〇分程で尾根に出た。

(記)

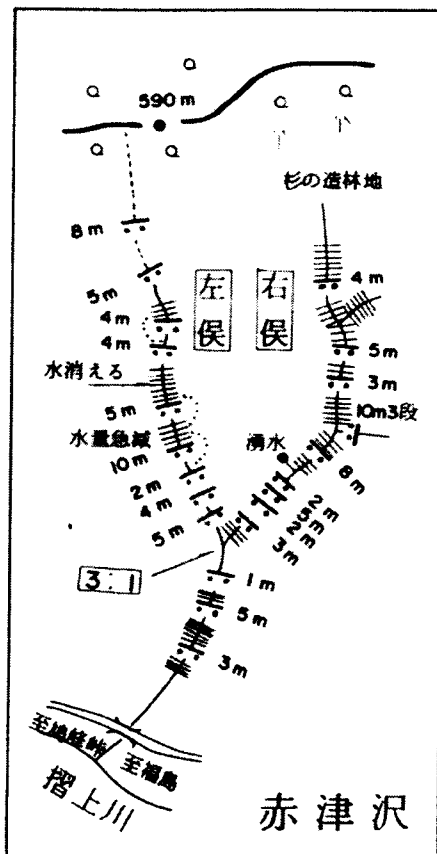
「タイム」 赤津沢出合(一五:三〇)
 ↓二俣(一五:三五) ↓遊行終了
 (二六:一五)

赤津沢右俣

一九八三年六月四日

一四時一五分、下降開始。実はこの時点では小スリバチ沢に入ったつもりであった。尾根一本の違いであるが、稜線上でおおざっぱな地形確認をしただけで下りはじめたのが失敗のもとだった。途中まで下って変だと思いはじめ、左俣が合流した所で、赤津沢右俣を下ってしまったのだとはつきり自覚した。

雑木林をぬけると笹原となり、その下は手入れの悪い杉の造林



地となっていた。このあたりあちこちにウドがかたまって生えており、もう少し早くくれば良かったと悔やむ。

一四時三〇分、水流が出てきて、いよいよ本格的な沢下りとなる。小滝が出てくるが、ブッシュを利用し